

999の行く末は？

D51型245号機

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

松本零士無限創造軌道く80th anniversary クロニクルくを読んで書こうと思いき始めました。

更新は不定期です。

ネタバレが苦手な方はご覧を控えて下さい。

誤字がありましたら気軽にコメントしていただくと嬉しいです。

8/27 タイトルを「銀河鉄道999く無限創造軌道く(仮)」から「999の行く末は？」に変更しました。

更新はかなり遅れると思います。

目次

3号車	2号車	1号車
8	4	1

1号車

メーテルは鉄郎に向かって深刻そうな顔をして話した。

メーメル「ブラックホールが……」

メーテル「その暗黒トンネルが銀河系へ近づいているのよ、」

鉄郎「えーっ！ ブラックホール!？」

メーテル「そう、そのトンネルから列車が出て来たの。だから999はそのトンネルへ行くの。」

鉄郎は驚きながら答える。

鉄郎「ブラックホールのトンネルへ!？」

そう鉄郎が驚きながら答えるがメーテルは鉄郎に急かすように言う。

メーテル「急いで、車掌さんが待っているわ。」

鉄郎「これ……僕は夢を見てるのかなあ。」

その後鉄郎はメーテルを追って999に向かった。

メーテル「夢じゃないわ鉄郎!しっかりしなさい!新しい旅の始まりよ、鉄郎!」

その後二人は99番ホームにのぼるエスカレーターに乗りホームに向かうとエスカ

レーターの出口付近に車掌さんが居た。

車掌「少しだけ休んで停車しておりましたが、999号はまもなく発車します。機関車も待ってますよ！」

鉄郎「うわっ！ 車掌さん！」

その頃機関車の中では

機関車『銀河鉄道 999 デハ コレカラ、無限ノ彼方へ発車イタシマス。』

機関車『999発車！ 無限ノ終ワリナキ旅へ。』

客車では

鉄郎「終わらない旅の始まり……。」

メーテル「そう……。」

鉄郎「999は終わりのない旅……そうだったな。」

鉄郎「これは夢じゃないんだ、現実だ。」

メーテル「運命よ、終わりのない楽しく幸せな旅へ……。」

ポオーーツ

その汽笛の合図と共に銀河鉄道999……C62-50は終わりのない旅のため地球を発車した。

メーテル「いよいよ宇宙とは何か……の謎を解く時が来たわね、鉄郎。」

鉄郎「そうだね、これが僕たちの運命なんだ。」

鉄郎「メーテルと一緒に僕は幸せ、これが楽しい旅の始まりだ！」

鉄郎「僕は行く、メーテルと共に999で、永遠の彼方へでも行く！」

鉄郎「これこそ本当の夢だ！」

鉄郎「終わりのない永遠の旅が今、始まった！」

メーテル「アンドロメダ・・・オリオンより更に彼方へ・・・私たちは行く、999は止まらない。」

車掌「そうです、私も止まりません。」

メーテル「新しい旅の始まりね、車掌さん。」

車掌「そうです。」

車掌「終わりになき旅のこれが・・・始まりです！」

機関車『終ワリナキ線路ニ今、乗リマス。』

機関車『エネルギー全力発進！』

機関車『時空ヲ越エテ目的ノ彼方へ、自分モ後悔ハイタシマセヌ。』

?1「でも旅は長いわ、さあ食べてお茶をお飲みなさい、鉄郎さん。」

鉄郎「あつ！あなたは！・・・。」

2号車

?「でも旅は長いわ、さあ食べてお茶をお飲みなさい、鉄郎さん。」

鉄郎「あっ!!」

鉄郎「あなたはガラスのクレアさん!!」

?「改めクレア」そう、おひさしぶりね、鉄郎さん。」

メーテル「あなたは宇宙空間で溶けてしまったんだと・・・ばかり・・・。」
メーメルは泣きながら再開を喜んだ。

クレア「いいえ。魂は永遠。ハーロツクさんやクイーンエメラルダスさんが私を助けてくださいました。」

クレア「ほら。」

鉄郎「あっ!!あれはハーロツクさんのアルカディア号だ!!」

クレア「そして・・・。」

クレア「あちらにエメラルダス号が・・・ほら。」

その頃それぞれの船では

ハーロツク「俺はキャプテンハーロツク!!俺は俺の旗のもとに自由に生きる。」

エメラルダス「私はエメラルダス！宇宙が永遠に続く限り私の航海も永遠に続く。」
999に戻り

メーテル「地球はもう見えない。」

車掌「オリオンもアンドロメダも過ぎ去った。」

車掌「今、時間は「無」……。」

ここで鉄郎はふと疑問を持った。

鉄郎「そういえばどうして窓を開けても平気なんだろう、宇宙空間なのに？」

鉄郎「外は宇宙空間……。大気など全くない真空のはず……。機関車さんの煙だつて流れて見える。」

メーテル「銀河鉄道999の空間線路は、見えないけど永遠に続く空間トンネルライ
ン……。窓を開けても真空では無いから平気なのよ。」

メーテル「見えない空間のトンネル……。宇宙列車の安全を守る大切なトンネル。」

メーテル「誰が作り設定したのかそれは永遠に判らない……。」

鉄郎「永遠に!?!すごいなあ!!」

車掌「さあ皆さん。永遠と共にご一緒によろしく。」

鉄郎「僕もよろしく車掌さん。」

クレア「私はガラスのクレア……。よろしくね……。」

メートル「永遠にご一緒の旅をする大切なクレアさん。よろしくね。」

機関車『ブラックホールノ暗黒トンネルカラ出テキタ、列車トスレチガイマス。ゴ注意ヲ……。』

鉄郎「え？あれは……。」

その空間にはバラバラになった列車と思われる部品などが多く見られる。

鉄郎「バラバラに砕け散っている!!」

メートル「ブラックホールの暗黒トンネルは時空トンネル。時空を越えるのは、衝撃が激しいからね。」

鉄郎「あれは!!」

鉄郎「美しい人だ、人間みたいだよほら。」

その言葉を聞いて車掌さんは最後尾の展望デッキに行きその人を回収する作業をする。

車掌「回収成功です。」

鉄郎「これは……地球人と同じ……ように見える……。」

メートル「……。時を越える衝撃をブラックホールの暗黒トンネルの中では受けて……。」

鉄郎「亡くなったのか……。」

車掌 「この方、データを持ってます。」

鉄郎 「データ？」

メーテル 「地球人とは少し違うわね、鉄郎。」

3号車

メーテル「地球人とは少し違うわね鉄郎……」

鉄郎「うん……。でも星は無限大にあるのだから同じって事は珍しい事だよね。いろんな事だよ。いろいろな違う空間で宇宙はひとつじゃないかも……」

車掌「このデータ……何か……」

鉄郎「あつ。」

鉄郎「これは……地球人の姿じゃない……」

そう話ながら鉄郎達は機関車に入り機関車と現れた列車について話始める。

機関車「コレガブラックホールノ暗黒トンネルノデータニアツタ映像デス。地球ヤ太陽系、銀河系型デハアリマセン。」

機関車「上下左右……スベテガ重力ノ違ウ別次元ノ型体ヲモッタ列車デス、ハイ。」

鉄郎「これは地球型じゃない！異空間……別空間の乗り物だ……」

メーテル「そうね……でも技術力は地球人以上……それが砕けたなんて……」

そして999とアルカディア号とクイーンエメラルダス号はブラックホールの暗黒トンネルに突入しようとしていた。

ハーロック「トンネルへ入るぞ！外板プレートをしっかり可動させろ！」
クルー「はい！」

ハーロック「トチロー・・新しい海へ行けるぞ。アルカディアを改造してくれた君のおかげだ！」

エメラルダス「トチロー!? 時空を超えたらまた、あなたに会えるかも・・そうだと私は嬉しい。」

鉄郎「トンネルへ入った！」

メーテル「ハーロックとエメラルダスも入ったわ。」

鉄郎「僕らの宇宙は、限りある時空に浮かぶ世界か・・。無限時空の別世界・・それも限りなくたくさんあるのか、宇宙つてものは・・。」

鉄郎「これが新しい旅の始まり！僕は必ず生きて地球へ戻る。」

メーテル「そうよね、鉄郎。」

クレア「私も・・このガラスのクレアも、メーテルさんとご一緒にね。」

メーテル「ひとつではなく・・別の宇宙空間が・・それぞれブラックホールのトンネルでつながっているのか・・巨大な宇宙空間は永遠の彼方までひとつなのか・・もし・・たくさんあるのだとすれば・・。」

メーテル「時の流れもそれぞれの宇宙で違うはずだし生命のすごすそれぞれの運命も

違う・・・それがこれから999で判る・・・」

そして999は別宇宙から来た正体不明の列車とすれ違い999は列宇宙につながっていると思われるトンネルに入っていく。

宇宙はひとつなのか・・・まだ生きている生命体はお互いに知らない。無限大無数にあるとすれば命の長さも変わる・・・

ついに鉄郎とメーテル含む999の新しい世界への旅が始まった・・・これからの旅は誰も知らない。

現実か夢か判らない旅・・・それが始まった・・・

終わりも何時になるのかまだ判らない旅が始まった。